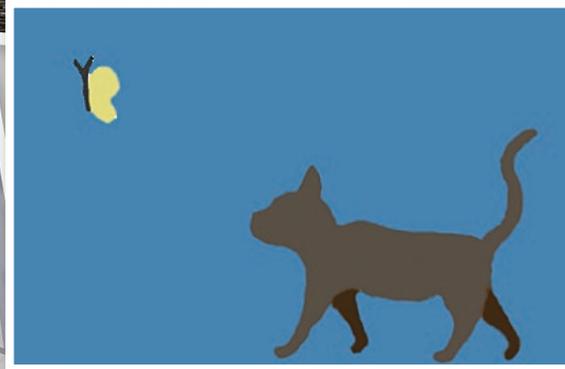
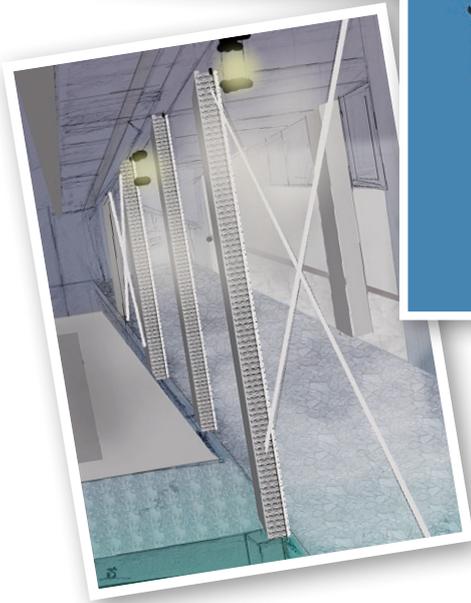


図書館だより

Library News No.77

National Institute of Technology, Nara College
(Nara National College of Technology)

2020年3月 奈良工業高等専門学校図書館発行



表紙画像は、2C 砂原 学歩さん(中央)、2E 吉川 隆太さん(右下)
2I 鳥 千晴さん(左下)、2I 山本 清也さん(右上)
2S 北村 優樹さん(左上)

目 次

巻頭言	2
クラス・個人多読・読書感想文コンクールについて	3
読書感想文コンクールを終えて	4
読書感想文入賞作品	6
学生図書委員会 活動報告ほか	12
ブックハンティング、読書週間展示、図書福袋	15

巻頭言

恐ろしい体験

電気工学科 小坂 洋明

今回の巻頭言を担当することになった。高校生や大学生の頃、巻頭言のような始めの方に書いてある文章を見たことはある（読まずにとばしていた気もする）が、自分が書く立場になるとは想像もしていなかった。

人目につく文章を書くというのは、恐ろしい体験である。特に今書いているような、エッセイのような文章は。端的に言えば、馬鹿がばれる。知られたくない自分の知能の程度、性格、思想信条や嗜好まで全て、読む人が読んだら読み取られてしまう。読んだ人に次に会ったら鼻で笑われる、と読まれる前からびくびくしてしまう。文章に限らず、他人に何か情報を発信する時には多かれ少なかれ自分をさらけ出すことになる。その点、文字どころの話ではないYoutuberはどう思っているのだろう。

その点、技術文書や理系の学術論文を書くのはいい。構成は決まっている。自分の主観やレベルは関係ない。論理的な流れを作り、それに従い客観的なことだけ積み上げ、結論に至ればよい。学生の頃はそう思って書いていたが、他人の論文を読むうちに、短く明快に本質を突いた書き方の論文や、主観的だが説得力のある論理展開で結論を導く論文を読むと、結局自分の素性がばれるのは変わらないことに気がついて、またびくびくしてしまう。何か文章を書く度にびくびくしては仕事にならない。カウンセリングを受けて、心の整理をした方がいいかもしれない。自分の書く文章や論文は残念ながらごく少数の方、何となれば誰も読まないから大丈夫、と心を落ち着かせ、文章を書き続ける。

10年ほど卒業研究を担当している。毎年、何人かの卒業論文の第一稿を読む羽目になる。ほとんどは非論理的で何が言いたいのか分からないし、話の流れはからまったコードのように無秩序で、読むのに疲れるし時間がかかる。文句を言って突っ返したくなるが、自分も同じ頃平気で大差ない文章を書いていたことを思い出し、黙って読みにくい文章を読み続ける。

たまにいきなり良い文章で書いてくる卒研生もいる。成績優秀な学生とは限らない。話を聞いていると、共通点は実験レポートを自分でよく考えて書いていた、あるいは本が好きで沢山読んでいた、のようである。よく言われていることであるが、良い文章を書くためにも本をたくさん読むことは必要である。学校が推奨する本には目もくれず、星新一のショートショートや作家の小説でなくエッセイばかり読んでいても、読まないよりはずっとよいはずである。多分。

世界の15歳の中で日本人は読解力が急激に低下している、と最近のニュースにあった。試験の際、そもそも問題文が正しく読み取れていないと思われる学生が増えている、という話も耳にする。今の若い人に、何でもいから本を読んでほしい、飛ばし読みでなくじっくり読むことができるようになってほしい、と思う。あと何年、何十年か経ち、何か書かなければならなくなった時のためにも。

クラス・個人多読 読書感想文コンクール表彰について

【クラス多読表彰】

クラス多読表彰は、図書館の統計に基づき、一人当たりの貸し出し冊数の多いクラスを表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰されたクラスには副賞として、希望図書の購入ができる権利を贈りました。



第1位	機械制御システムコース1年	(17.3冊/人)
第2位	物質創成工学専攻2年	(9.8冊/人)
第3位	機械工学科5年	(8.4冊/人)
第4位	機械工学科4年	(8.2冊/人)
第5位	電子制御工学科1年	(6.8冊/人)
第6位	物質化学工学科3年	(5.8冊/人)

【個人多読表彰】

個人多読表彰は、図書館の統計に基づき、貸し出し冊数が多い学生個人を表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰された学生には副賞として、図書カードを贈りました。

第1位 (非公表)	第6位	電子制御工学科1年	大野悠翔さん		
第2位	機械制御システムコース1年	吉村勘太郎さん	第6位	機械制御システムコース1年	伊東 聡さん
第3位	物質化学工学科1年	山口三佳さん	第8位	情報工学科5年	辻浦沙季さん
第4位	機械制御システムコース2年	古川優人さん	第9位	機械工学科4年	寺下宗孝さん
第5位	機械工学科4年	大林彩乃さん	第10位	機械工学科5年	富永杏一さん

【読書感想文コンクール表彰】

表彰式は1月7日(月)昼休みに校長室にて行われました。



令和元年度

読書感想文コンクールを終えて

教育支援センター運営委員会

第44回校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。1年生からは194編、2年生からは188編と、合計382編の応募がありました。教育支援センター運営委員会の教員9名と国語科教員3名による審査・投票の結果、その中から4名の入選作を決定しました。以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、榮譽をたたえたいと思います。

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得て、最終選考に残った作品は佳作とし、その学生の氏名も併せてここに紹介します。

最優秀賞

物質化学工学科2年 齊藤 みづほ 今まで過ごした日常は

優秀賞

電気工学科2年 寶持 和馬 人の力——君の臍臓をたべたいを読んで——
情報工学科1年 北畑 祐希 障害者から見た「本当の障害」とは何か
物質化学工学科1年 原 朱眸 心が晴れた記念日～心晴日和～

佳作

2M 清水 健輔	2M 庄野 晴人	2M 松本 尚樹	2E 神谷 柁徳
2E 南阪本咲月	2S 荒深 健伍	2S 宮田丈太郎	2I 谷奥 稔
2I 徳持 進一	2I 椋本 純	2C 貫野 楓晃	2C 床呂 祐佳
1M 池田 侃市	1M 小澤 陸人	1E 池口 聖直	1E 羽瀨 颯
1S 入江 駿	(非 公 表)	1I 川城 聖矢	1I 島岡 宏彰
1I 竹田 岳人	1C 小倉まゆき	1C 金子わかな	1C 菊山 愛花
1C 横山 温人			

さて、入選作品について、以下に講評を述べます。

最優秀賞に選ばれた2Cの齊藤さんは、昨年映画化された『日日は好日』について感想をまとめています。本作品は主人公が「お茶」を通してどのような状況でも前向きに「生きる」ことの喜びや幸福を見いだしていく作品です。齊藤さん自身が茶道を学んでいるということで、親近感を抱きながらこの作品を読んだことがうかがえます。この感想文では、本を選んだきっかけ、あらすじ、今回の読書を通して齊藤さん自身が感じたことや変化したこと、印象に残った部分が素直な言葉で表現されています。簡潔でよくまとまった感想文と言えるでしょう。齊藤さんにとって、茶道においても今後の生き方においても、得るものが多い読書体験だったように思います。

次に、優秀賞に選ばれた3名について述べていきます。2Eの寶持さんは、はじめ2015年に発表されてその後大ヒットし、2017年には実写映画化された『君の臍臓をたべたい』を題材としています。本作は「君の臍臓をたべたい」という言葉に込められた意味や、読者の予想を裏切る結末が目撃されることが多いように思われます。ところが寶持さんは主人公の「僕」の成長に着目し、他者の存在によって人が成長できることを、自身の経験と

結びつけながらまとめています。このように実体験と重ね合わせることで、その読書経験はより豊かなものとなり、読者自身の経験として蓄積されていくことでしょう。

IIの北畑さんは、視覚障害者に聞き取り調査をし、その生き方や考え方をまとめた『目が見えない人は世界をどう見ているのか』を取り上げています。読書感想文の前半では、視覚障害者ははじめから視覚がないからこそ、それ以外の感覚でバランスを取っていること、視覚情報がないからこそ世界を立体的に捉えられるという視覚障害者の豊かな感覚を紹介しています。後半では障害者の社会的な位置づけや、差別や偏見が生まれる原因を北畑さんなりに考えてまとめています。

ICの原さんは、いじめに遭っている少女がある老人と会うことで一人前の大人に成長していくという『心晴日和』の感想を書いています。作中で主人公が老人の言葉を聞いて成長していくのと同じく、原さん自身もこの老人の言葉から学ぶことが多かったようです。また、作中では主人公の両親が偶然の積み重ねの結果運命的な出会いを果たし、主人公もまた大人になってからある男性と運命的な出会いをしています。このような場面から、原さん自身も偶然と必然の関係性について考えを深めたとのことでした。北畑さんも原さんも、読書を通して新たな視点を獲得し、物事を多角的に捉える力が養われたように思います。

ところで、2019年12月23日に国立青少年教育振興機構が「子供の頃の読書活動の効果に関する調査研究」の報告書〔速報版〕を発表しました。これは、一般成人の現在と過去の読書活動と、意識・非認知能力との関連を検討したものです。報告書ではその結果が次のようにまとめられています。

- 年代に関係なく、本（紙媒体）を読まない人が増えている。（平成25年と平成30年を比較して）
- 一方で、スマートフォンやタブレットなどのスマートデバイスを使った読書は増えている。
- 読書のツールに関係なく、読書している人はしていない人よりも意識・非認知能力が高い傾向があるが、本（紙媒体）で読書している人の非認知能力は最も高い傾向がある。

三点目にある「意識・非認知能力」とは、「自己理解力、批判的思考力、主体的行動力」を指すそうですが、この中には自己肯定感や論理的思考力、物事に進んで取り組む意欲なども含まれています。紙媒体であれ電子媒体であれ、読書をしている人は読書をしていない人よりも「意識・非認知能力」が高く、特に紙媒体で読書をしている人は、この能力がより高いという結果が得られたということです。

活発な読書活動は幸福感、メンタルヘルス、共感性、読解力、寿命の向上などの効果が得られると言われていきます。その一方で、紙媒体での読書量は、年代を問わず減少の一途をたどっています。

先に紹介した報告書によれば、媒体を問わず、読書をすることで肯定的な効果が得られるようです。本校に在籍している多くの学生さんはスマホをはじめとする電子機器をよく利用しているでしょう。その利用方法の一つに電子書籍を加えてみてはいかがでしょうか。まずは短編やショートショート、ゲームや漫画の原作などから始めてもいいでしょう。気負うことなく、気軽に読書活動を生活に取り入れ、慣れてきたら、気に入ったものを改めて紙媒体で読んでみるのもいいかもしれません。そうして少しずつ読書活動の幅を広げ、来年度は今年度から一歩成長した皆さんから、今年度を上回る力作が応募されることを期待しています。

(国語科 松井)

読書感想文入賞作品

最優秀賞

『日日是好日』 森下典子 著

今まで過ごした日常は

物質化学工学科2年 齊藤 みづほ

私の親戚のおばさんは茶道の先生だ。そんなこともあり、私は四歳頃から茶道を教えてもらっていた。中学校の間と高専に入学してから一年目は部活動が忙しくお休みしていたが、また今年から始めることになった。そんな時に母から私でも読みやすい茶道について書かれた本があるからと勧められた「日日是好日」という本。ちょうど映画化もされていたため興味があり読むことに決めた。

この本は、主人公の森下典子がひょんなことからこの美智子と、近所の武田先生の茶道教室に通うことになることから始まる。就職につまずき、失恋、父の死という悲しみのなかで、気が付けばいつも典子のそばには茶道があった。これは茶道を軸に典子が大人になっていく日々を描いた本だ。

私はこの本を読み終わったあと、今まで見てきた世界と今日に映っている世界は全く別なもののように感じた。本の題目でもある「日日是好日」という言葉は本文中にも何度かでてくる。これは元々禅宗の言葉で「毎日が素晴らしい日」という意味だ。最初、私はこの言葉の意味を深く捉えていなかった。だが、主人公は季節の色々な移り変わりや自分の置かれた状況など、どんな日もその日を思う存分味わうことで、茶道とはどういう「生き方」なのかに気付く。そうやって人間はたとえ周囲が「苦境」とよぶような事態に遭遇したとしても、その状況すらも楽しんで生きていければどんな日も「いい日」になる。これこそが「日日是好日」の本当の意味だと気付いた時、私は「何も知らなかった、気付かなかった」世界の色がより鮮やかに変わった気がした。主人公が身の回りの出来事から「日日是好日」の意味に気付けたように、人間はそのことに気付く絶好のチャンスの連続の中で生きているのではないかと思う。私は今まで何年も続けてきた茶道はそんな事に気付けるきっかけを与えてくれていたのかと思い、驚いた。もう少し早くこの本に出会えていたらと思う。

本文に「会いたいと思ったら、会わなければならない。好きな人がいたら、好きだと言わなければいけない。花が咲いたら、祝おう。恋をしたら溺れよう。嬉しかったら、分かち合おう。幸せな時は、その幸せを抱きしめて、百パーセントかみしめる。それがたぶん、人間にできる、あらんかぎりのことなのだ。」

とある。大切なことに気付ける絶好のチャンスの中にいるのに、毎日をただ消費するように生きていた自分にこの言葉を教えてあげたいと思った。「ただの」日常なんてないのだ。心の持ちよう、感じ方を少し変えるだけで日常がこんなに素晴らしいものに見える。それを教えてくれたこの本に出会えたことを心から感謝したい。

この本を読むことで習い事くらいにしか思っていなかった茶道をもっと身近に感じる事ができた。もちろん茶道をしたことがない人にでも楽しめると思うし、学べることは茶道の面白さだけではないので皆にぜひ読んでほしいと思う。

注意

図書の利用にあたっての注意

本は大事に扱きましょう

時々、付箋が付いたままだったり、中に書き込みがしてあったりする専門書が返却されます。誰か他の人が貸してくれた本に、付箋を付けたまま返しますか？中に書き込みをしますか？図書館の本は、あくまで借り物です。皆の本です。そのことを分かったうえで利用してください。

汚損・破損された場合は弁償していただきます。

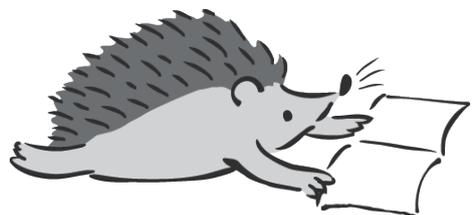
返却期限を守ってください

期限内に読み切れなかった本（雑誌）は、他の人に予約されていなければ返却期限を延長することができます。

本（雑誌）と学生証をカウンターへ持って来てください。

手続きをせず、そのままズルズルと借り続けることはやめましょう。

図書の延滞があると、新たな貸し出しはできません。



優秀賞

『君の臍臓をたべたい』 住野よる 著

人の力——君の臍臓をたべたいを読んで——

電気工学科2年 寶持 和馬

「ねえ、君はさ、本当に死ぬの？」

話の中の「僕」が山内桜良に聞いた言葉だ。自分も読んでいて、余命宣告を受けた人とは思えない明るさと笑顔に驚かされた。それと同時に、自分が余命宣告を受けたら、現実を受け入れ、前向きに生きる強さが自分にはあるのかと考えた。きっと今の自分には想像もつかないほどの恐怖感に押し潰されて、「周りを悲しませたくない」という思いはすぐに忘れてしまうだろう。そんな自分には山内桜良は輝いて見えた。

この「君の臍臓をたべたい」という小説では、主人公である「僕」が病院でクラスメイトの山内桜良の「共病文庫」という文庫本を偶然拾う。その中には、山内桜良が臍臓の病気で余命が長くないという内容が綴られていた。そして「僕」がその本を読んだことにより、身内以外で山内桜良の秘密を知る初めての人物となり、山内桜良が気を遣わずに話をできる存在となっていた。二人で話をしたり、旅行へ行ったりするうちに、お互いに自分の欠けている部分を持っていることに気づき、心を通わせながら成長していく。しかしある日余命を全うすることなく通り魔に刺されて亡くなってしまおうという話だ。

私はこの話を読んで、「僕」と山内桜良の関係をとても羨ましく思った。なぜなら、お互いに自分の欠けている部分を持っている存在に巡り会うのはそんなに簡単ではないからだ。自分にはそんな存在を必要としていた時期があった。

私は中学三年生の時に、野球部のキャプテンをしていた。私は特別な才能がある訳でもなかったので、チームを引っ張っていく実力がなくて、最初はとても不安だった。しかし、チームメイトの一人に、とても実力のある選手がいた。私はその選手にいつも憧れを抱いていて、少しでも近づけるように努力をすることができた。中学の野球部が終わって気づいたのは、「憧れの存在というのは、大きな力を与えてくれる」という事だ。私は野球でこの事に気づいた。「僕」がこのまま山内桜良と何の関わりを持たずに生きていたら、きっと誰とも関わろうとせず一人で生きていこうとしていただろう。そんな「僕」が人に心を開こうとするほどの力があるんだと改めて分かった。心を開くことができた「僕」の恩人と言っても過言ではない山内桜良と残り短い時間を二人が過ごせば、お互い得られるものはたくさんあったはずだ。しかし、その短い時間を通り魔によって消されてしまった「僕」の喪失感は計り知れないものだったと思う。大切な人が奪われた悲しみは深く、簡単には癒えることはない。でも、今まで過ごしてきた日々は「僕」をととても強くさせていた。桜良の願いだった「僕」が苦手だった桜良の大親友の恭子と友達になろうと恭子に歩み寄ったのだ。まるで「僕」の中に桜

良が乗りうつったかのように成長をした「僕」を見て、人は自分一人じゃ成長できないんだと分かった。

この「君の臍臓をたべたい」を読んで、人のつながりは時間がすべてではないと分かった。きっと、どんな人にも自分には無いものを持っていて、補い合うことが大切だと「僕」と桜良は教えてくれた。また二人が出会ったら、桜良はこう言うだろう。「次はどこを旅行する?」と。

『目の見えない人は世界をどう見ているのか』 伊藤亜紗 著

障害者から見た「本当の障害」とは何か

情報工学科1年 北畑 祐希

私は今回、読書感想文を書くにあたって、「目が見えない人は世界をどう見ているのか」という本を読んだ。視覚障害者へのインタビューをもとに、目が見えない人がいかにして周囲の環境を知り、目に見える人の社会の中で生きているかをまとめた本だ。人間の受けとる情報の九割を司っているとも言われる視覚を失った時、人はどうなるのか。つまらなくはないのだろうか。そんな単純な疑問から、私はこの本を手にとった。

この本の序章を読み終えたとき、私の頭の中は驚きに満ちていた。まず、「目が見えない」ことと、私たちが「目をつぶる」ことは、まるっきり違うことだという。筆者はそれを「四本脚の椅子と三本脚の椅子の違いのようなもの」と例えた。四本脚の椅子から単純に「視覚」という一本の脚を取ってしまえば、その椅子は傾いてしまう。しかし、脚の配置を変えれば、言い換えるともとから「視覚」はないものとして感覚のバランスを考えられれば、三本脚でも椅子は十分に支えられる。目が見えなくとも、大きな不自由をせずに生きられる、ということだ。スポーツも、絵画の観賞も、視覚以外の感覚があれば不可能ではないことなのだ。

この本の文章の中で最も私が共感できたのが、「目に見える人の世界は二次元である」というところだ。私は前々から、自分が見たままを描いたはずの風景画が、どうしても平面に見えることを不思議に思っていた。この本によれば、それは私たちが物体をある一面からしか捉えられないかららしい。視覚情報がむしろ余計なものとなり、私たちの見る世界には死角が生まれてしまうという。

一方、目が見えない人は、情報の少ない分、ある種の余裕が生まれ、空間を想像することができるという。つまり、私たちからすれば死角である部分さえ、彼らは捉えているのだ。目が見えない人は案外、物体を立体的なものであると、私たちより理解している。それを聞いていると、目が見えないことがうらやましいとすら感じられた。

ここで、現在の社会における視覚障害者の立ち位置を考えることとしよう。視覚障害者含む障害者は今、「可哀想な人」というレッテルを貼られてしまっている。たしかに、目が見えない、耳が聞こえない、と言われると、障害はネガティブなもののように思える。

しかし、この本を最後まで読んだ私に言わせれば、目が見えないことは一つの「キャラ」に過ぎない。目が見えない人は、視覚以外の感覚でちゃんとバランスをとっているし、それ以外の、性格などの面において彼らは私たちとほぼ同じといえる。彼らにとって、私たちからの「配慮」は私たちとの距離を感じるだけの邪魔者でしかないだろう。「目が見えない」ことは、「運動オンチ」のような、「笑ってもいい個性」と何ら変わらないのだ。

この本を通して私は、すべての「ちがひ」は人間の生み出した余計な憐れみのもとであると考えた。「目が見えないなんて可哀想。自分は見えてよかった」「女性は体力がなくて大変だなあ。自分は男でよかった」などのような、憐れみとそこから生まれる優越感のようなものが、差別や偏見を作っている、ということだ。だが、結局人間は、平等に生きられさえすれば「ちがひ」は何のハンディキャップでもなくなる。今は理解を求めなければならないかもしれないが、いずれ余計な「配慮」はこの世から消えていくだろう。

『心晴日和』 喜多川泰 著

心が晴れた記念日～心晴日和～

物質化学工学科1年 原 朱眸

この物語の主人公である美輝は、クラスの女子からいじめられている14才の少女。学校に行こうとすると、頭が痛くなったりお腹が痛くなったりするため、病院に行くことになる。

そして、病院で井之尾という不思議な老人と出会い、「春を感じるものの写真を撮ってほしい」というお願いをされるという所から、ストーリーが展開していく。普段は学校に行かず、外へも出なかった美輝だったが、老人のお願いを聞くために外へ出てみると、通学路には春があふれていることに気がついた。

この場面で美輝は、その気づきを老人に報告する。すると老人は、「春を感じるものを探して歩く人には、春を感じさせるものがドンドン目に飛び込んでくる。結局、不幸な人は自分の方から積極的に自分を不幸にするものを集めて生きているということだ。」と、教えた。その後、美輝は少しずつ考え方をポジティブに傾け始める。

そんな中で、いじめの主導者である女の子が、実は塾でいじめを受けている現場をたまたま見かける。このような出来事にも悩み、井之尾に相談しながら、不登校を解消していき、立派な社会人になっていく美輝の姿を見ていると、本当に応援したくなった。

それにしても、井之尾という老人は美輝に色々な話をしていた。やはり老人に学べということだろうなと私は思った。一昔前よりも老人に学ぶという機会が減っていると感じる。ぜひ身の回りの老人に格言を教えてもらいたい。

この物語の全体像としてはそんな感じだが、中でも私が一番心に残った場面がある。それは、美輝が母親に、「父親との出会い」について問う場面だ。同じ学校、会社だったという、普通の出会いではなく、両親は数々の偶然が重なって運命的な出会いを果たしていることを美輝は知る。どの偶然が欠けていても、両親は出会わなかったし、美輝が誕生することもなかった。その事実を知った美輝は、更に「自分」の大切さを理解し、希望の道へと進む活力へと変える。

驚くことに、両親の出会いについて聞いてみたらいいと言ったのも井之尾であった。美輝は、井之尾が予言者なのではないかと考えたが残念ながら井之尾の正体は全て読んでも明かされなかった。

ストーリーの最終章には、28才の美輝が、両親と同じようにある男の人と運命的な出会いを果たす場面がある。

例えば、電車に間に合わなかったが、数年ぶりの友達と再会できた等のように、偶然は必然であるのだと改めて感じた。ちなみに、スピリチュアル的には、「偶然は存在せず、全て意味があり、必然的に起きている。」と考えられ、「シンクロニシティ」と呼ばれているそうだ。そう考えてみると、不登校少女の美輝が、老人井之尾に出会って一人前の大人になるというのも必然だったと考えられる。井之尾と出会わなければ、不登校は改善されなかっただろうし、美輝にとって井之尾は本当の意味でのキーパーソンだったのである。

今回の物語では、老人井之尾によって、自分も数々の事に気づかされ（ポジティブな言葉で人生は切り開ける…など）同時に、偶然についても興味を持つことができたし、この本に出会うのも必然だったのかなとも、最後の最後まで考えている自分がいる。それと何より、主人公の美輝に共感できた。中学一年の頃、あまり学校に行きたくないと思っていたので、主人公と同じ悩みを持ったこともあった。これからも、共感でき考えられる本に出会えることを、期待したいと思う。

図書館だより77号の表紙絵について

図書館だより77号の表紙絵は、美術の授業の作品で教員より推薦された13点の中から教育支援センター運営委員会で投票により5点選出しました。13点すべての作品が図書館ホームページでご覧になれます。アニメーション付きのものもあります。

学生図書委員会 活動報告ほか

1年間を振り返って

4I 岡山 真衣

図書委員会委員長と広報プロジェクトリーダーを務めさせて頂いています。4年情報工学科の岡山です。

今年度の図書委員会は広報プロジェクト・雑誌入れ替え+福袋プロジェクト・読書週間プロジェクト・高専祭プロジェクトという4つのプロジェクトが活動を行っていました。

特に高専祭プロジェクトは、昨年度まで活動していたメディアコンペティションプロジェクトを廃止し、その代わりとなる新たなプロジェクトとして立ち上げられたので今年が初の試みでした。高専祭ではミニ図書館を行い、大盛況でした。

図書館に入れて欲しい図書の希望調査を行い、その購入希望図書を実際に大きな書店に購入しに行くイベントである通常年2回のブックハンティングも、図書館の改修工事の為、今年度は秋期の1度のみ開催されました。

ここで、先程紹介させて頂いた学生図書委員会の4つのプロジェクトの活動を紹介します。

まず、広報プロジェクトです。このプロジェクトでは年に1回の図書館だよりを通じ活動の様子を伝えます。更に、各プロジェクトの企画と連動してTwitterにて広報活動も行います。今年度は図書委員会の日時、各イベントのおしらせを積極的に行っていました。

また読書週間プロジェクトでは、秋に行われる読書を推奨するイベントの準備等を行うプロジェクトです。テーマに沿って選書を行い、オススメポイントを明記した上で特設ブースにて展示を行います。「何度も読み返したくなる本」というテーマで12月中旬から2週間ほど展示しています。

雑誌入れ替え+福袋プロジェクトは、あまり読まれていない雑誌や廃刊となった雑誌の購読中止や、学生や教職員のニーズに合わせた雑誌の購読を提案するプロジェクトです。また冬期に行われる図書福袋イベントという、実際に開けてみないと借りた本がわからない状態で図書の貸し出しを行うイベントの選書もこのプロジェクトの方々が行います。福袋図書の選定も12月中旬から準備を行っています。

最後に高専祭プロジェクトです。このプロジェクトは今年度から始動したプロジェクトで、今秋に開催される高専祭での出し物を行うプロジェクトです。今年度の高専祭ではミニ図書館という名目で読み聞かせコーナーやオススメ本コーナー、折り紙コーナーの準備、運営をこのプロジェクトが行います。

今年度は新プロジェクトの立ち上げ、また図書館改修工事の為今年度は例年までの図書委員会の活動と異なる活動が多かった年のように感じます。また、委員長やプロジェクトリーダーのようにまとめる役割に就いたのが私にとって初の経験でした。今年度の活動もわずかですが残りの委員活動で少しでも自身の成長に繋がれば良いと思います。

お気に入りの本は何ですか？

4M 大林 彩乃

はじめまして。高専祭でのミニ図書館のリーダーを務めさせていただいた大林彩乃と申します。

さて、みなさんは、ここに並んだ本を読んだことがあるでしょうか。怪盗クイーン、パセリ伝説、パスワード探偵団、南総里見八犬伝、都会のトム・ソーヤ、若おかみは小学生……。私事で申し訳ないのですが、このラインナップは小学校低学年時にわたしが何度も繰り返し読んだ本です。

今年の高専祭で開催したミニ図書館では、この中の怪盗クイーンと都会のトム・ソーヤを紹介させていただきました。もちろん、ミニ図書館は決して小学生のみが対象というわけではありません。ぐりとぐら、陸王、紅茶の時間、「世界の神々」がよくわかる本などなど……。図書委員のおすすめを厳選した60冊以上の本とポップで皆さんをお迎えしました。さらに折り紙もたっぷり用意したので、4歳のお子様から年配の方まで楽しんでいただけたと思います。

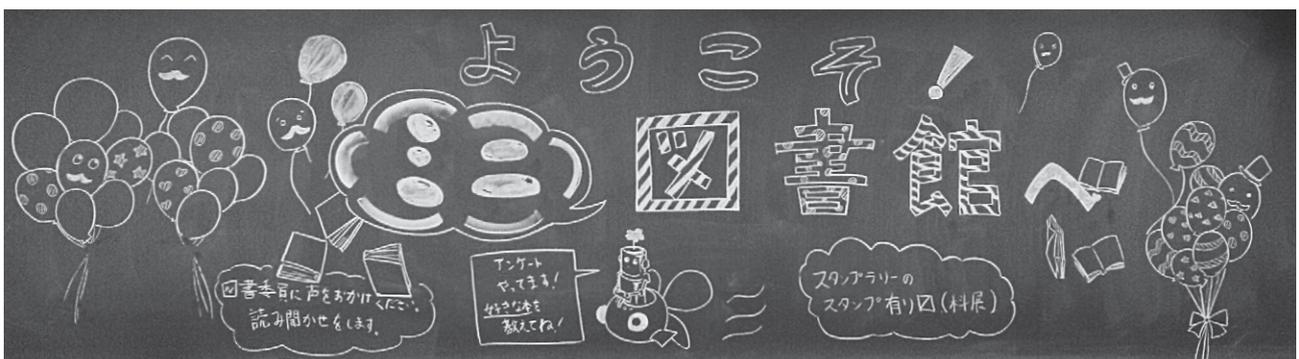
しかし、疑問に思う方も多くでしょう。なぜ模擬店ならぬ模擬図書館を、あえて高専祭で開催するのか。図書委員会が去年まで開催を続けてきた団体のパネル発表は、来場者数の減少などいろいろな観点から新企画を開催するはこびとなりました。新企画はより楽しい企画にしたい。そこで考えられたのが、高専生を知ってもらうための一風変わったアプローチです。

例えば、よく知らない人と話すとき、好きな食べ物や学校生活について話すよりも、お気に入りの本の話をした方が、相手の内面をよく知ることができたと思いませんか。

高専生は、普段何を考え、何を思っているのか。頭の中身は専門分野のことだけなのか。ミニ図書館が、一般の人にとって高専生の素顔に迫る内容になったとしたら幸いです。



最後に、ミニ図書館を開催するにあたって、たくさんの方のご協力をいただき、また迷惑をかけました。無事に開催し終えることができ、心から感謝しています。この場を借りてお礼を申し上げます。



今年度、読書週間プロジェクトのリーダーを務めさせていただきました、3年電子制御工学科の青木です。これから、読書週間プロジェクトの紹介と今年度の活動の振り返り、反省を行います。

読書週間プロジェクトとは、図書委員のおすすめ本を展示し、学生の方に図書館に足を運び、本に触れて頂くというものです。

そのため、読書週間プロジェクトでは、主に以下の5つの活動を行いました。まず最初に行ったことは、テーマの決定です。今年度の読書週間のテーマは「何度も読み返したい本」でした。面白い小説はもちろんのこと、役に立つ専門書などもオススメすることができました。次に、ブックハンティングで本を購入しました。事前にプロジェクトのメンバーからおすすめ本を教えて頂き、合計5冊の本を購入しました。そして、ポスターの制作を行いました。ポスターは各クラスの教室に掲示しました。その後は、ポップの制作をしました。ポップは、1人約2冊の本のポップを作成しました。それぞれ個性的で、本の面白さが伝わるポップが完成しました。最後に、仮設図書館の飾り付けを行いました。今年は図書館が改修中のため、仮設図書館にて展示をしました。図書館の方の協力もあり、スムーズに飾り付けを行うことができました。

これらの活動を終えて、反省点としては、読書週間プロジェクトの前例を知らなかったということが挙げられます。どのような活動をしているのかを知らなかったので、何をすればいいのかがよくわかりませんでした。そのため、前年のポップ制作では、事前に本を読み、文章を考えていたそうなのですが、今年度は事前準備をしていなかったため、作成に時間がかかってしまうといった出来事も起こりました。前年、読書週間プロジェクトに参加されていた方がプロジェクトメンバー内にいたので、事前に活動の流れを聞いておくべきだったと反省しています。

最後に、読書週間によって少しでも多くの方が本に触れ、お気に入りの本が見つかることを願っています。また、今回の図書館だよりを見て、少しでも読書週間プロジェクトに興味を持っていただけると嬉しいです。

図書館では学生希望図書を随時受け付けています。

図書館にないのでぜひ備えてほしいという本を募集しております。

カウンターへ申し出ていただくか、tosho@jimunara-k.ac.jpまでメールをお願いします。

詳しくは、図書館ホームページの「資料検索」のタブから「推薦（希望）図書」をご覧ください。

ブックハンティング

11月のみの実施となりましたが本科生・専攻科生・教職員総勢38名が参加しました。

ジュンク堂書店大阪本店で2時間ほどの間に199冊の本を選び仮設図書室に並べられました。



読書週間展示

今年度は仮設図書室での実施となりましたが、読書週間の展示を行いました。学生図書委員会のおすすめ本をポップ付きで展示し、期間中は貸出ができないのですが、早く借りたいという声が多く貸出を心待ちにされていました。

図書福袋



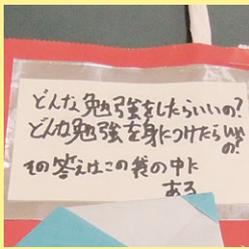
袋に入れて中身が何かわからない状態で貸し出します。中身は学生図書委員が選定した図書2冊入で、11袋限定で新春に貸し出しされました。袋には中身のヒントとなるメッセージや華やかな飾り付きです。

11袋すべての中身は裏表紙（16頁）で公開しています。

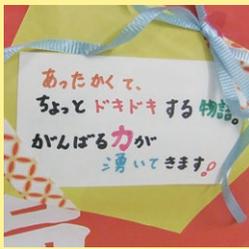
中身は裏表紙（16ページ）へ

図書福袋の中身 公開します！

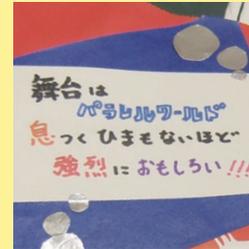
※()は資料番号です。



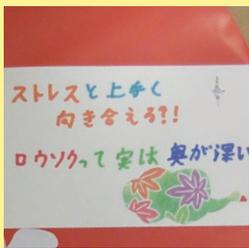
- ①
- ・国語と英語のカリスマ教師が教える AI時代の読む力 (0118523)
出口汪, 木村達哉著. -- 宝島社
 - ・東大教授が教える独学勉強法 (0118528)
柳川範之著. -- 草思社



- ②
- ・算数少女 (0102052)
遠藤寛子著. -- 筑摩書房
 - ・卵の緒 (0118258)
瀬尾まいこ著. -- 新潮社



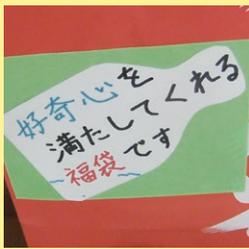
- ③
- ・日本沈没 (0045078)
小松左京著; 上. -- 光文社
 - ・日本沈没 (0027497)
小松左京著; 下. -- 光文社



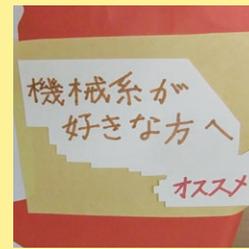
- ④
- ・ロウソクの科学 (0118392)
ファラデー [著]; 三石巖訳. -- 改版. -- 角川書店
 - ・スタンフォードのストレスを力に変える教科書 (0118474)
ケリー・マクゴニガル著. -- 大和書房



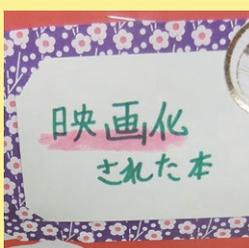
- ⑤
- ・秘密 (0087284)
東野圭吾著. -- 文藝春秋
 - ・マスカレード・ホテル (0105957)
東野圭吾著. -- 集英社



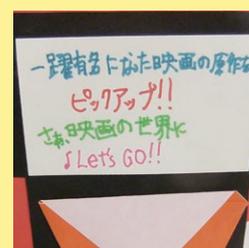
- ⑥
- ・おもしろい! 進化のふしぎ ざんねないきもの事典 (0115557)
今泉忠明監修; [正]
 - ・ホワット・イフ?: 野球のボールを光速で投げたらどうなるか (0112879)
ランドール・マンロー著; 吉田三知世訳. -- 早川書房



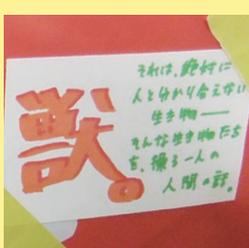
- ⑦
- ・クルマのメカニズム: 最新オールカラー: パーツごとの機能と原理を写真、図版で徹底解説=Mechanism of car (0113795)
青山元男著. -- ナツメ社
 - ・めっちゃメカメカ リンク機構99→∞: 機構アイデア発想のネタ帳 (0109145)
山田学著. -- 日刊工業新聞社



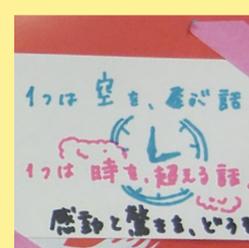
- ⑧
- ・告白 (0100881)
湊かなえ著. -- 双葉社
 - ・君の隣をたべたい (0113652)
住野よる著. -- 双葉社



- ⑨
- ・図書館戦争 (0096372)
有川浩著. -- メディアワークス
 - ・海賊とよばれた男 (0108566)
百田尚樹著; 上. -- 講談社



- ⑩
- ・獣の奏者 (0095495)
上橋菜穂子著; 1: 関蛇編-外伝: 刹那. -- 講談社
 - ・獣の奏者 (0095496)
上橋菜穂子著; 2: 関蛇編-外伝: 刹那. -- 講談社



- ⑪
- ・ナウシカの飛行具、作ってみた: 発想・制作・離陸-メーヴェが飛ぶまでの10年間 (0109707)
八谷和彦, 猪谷千香著. -- 幻冬舎
 - ・ナミヤ雑貨店の奇蹟 (0110168)
東野圭吾著. -- 角川書店

編集後記

図書館だより77号に記事をご寄稿頂きましてありがとうございました。今年度は図書館改修工事のため、行事を中止したり時期をずらしたり、イレギュラーな年になりましたが、不便ながらもご協力いただき、仮設図書室での展示等盛り上げていただきました。いよいよ新図書館が開館します。今後も宜しくお願い致します。

(図書館)



奈良高专
National Institute of Technology, Nara College

奈良工業高等専門学校 図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町 22

TEL 0743-55-6015

URL <https://www.nara-k.ac.jp/nncet-library/>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。